

ロベルト・ボラーニョの野生の探偵たちを読み終わった。読み終わって思ったこと。この小説は公園みたいだった。真ん中に構造的なすべり台がある公園。構造的なすべり台だけがある公園。この小説を読んでいるあいだ、私は毎日そこに出かけていってすべり台で遊んでいたのだ。このすべり台は見る場所や角度によってまったく違うかたちをしているから飽きることがない。いつまでも遊んでいられた。読書を中断するときは、夕暮れどきにもっと遊んでいたいのにしぶしぶ家に帰る子供のように、私は小説を手放し日常生活に戻っていった。そして次に公園で遊ぶときのことを考えて心躍らせていたのだが、もうそんな生活も終わってしまった。小説が終わってしまったからだ。

構造的なすべり台は、今自分の頭の中では、曾根裕のすべり台の作品にかなり近いイメージを持っている。赤いレンガを積み上げてできたすべり台。よく街中の公園にある鉄製のガイコツみたいなものではない。もっと彫刻的なポリウムを持ったものだ。階段、スロープ、トンネルが組みあわせて、複雑な、しかし美しいかたちをしている。私はこのすべり台をいろんな角度から眺めたり、いろんな方法で滑り降りたり（実にいろんな方法がある。まずは普通に滑る。スロープに砂をまいて滑る。スニーカーの底をつけて滑る。段ボールの切れ端にのって滑る。走り降りる、など。）またはスロープを駆けあがってみたり、トンネルのなかで寝転がったり、階段の頂上でぼんやりして遊んだ。

実際に遊んでいるときは気がつかなかったのだが、この公園は私の視界の右斜め前方にあったようだ。今公園のことを思いだしていると、右斜め前方にぼんやりと余韻があるのがわかった。昔、横浜の都筑区というところに住んでいたとき、家の目の前に公園があつて、その公園にもすべり台だけがあつた。しかしもちろん曾根裕のすべり台ではない。それは横幅が二メートルもありそうなスロープのおぼけみたいなものだった。スロープはコンクリート製でクリーム色をしている。私の視覚イメージはグーグルアースみたいに、その横浜市都筑区の公園を視界の右斜め前方に見ることができるところに舞い降りて固定された。遠くから見ると、巨大なクリーム色の塊はとてもしずべり台には見えなかった。アルゼンチンのイグアスの滝のように見える。イグアスの滝の正式な発音方法、正式なというのはつまりスペイン語の、という意味なのだが、とにかくそれをアルゼンチン人のヴァレリアに教えてもらったのにすっかり忘れて今では思いだすことができない。イグアスのスに強勢を置いて発音していたこ

とだけは覚えておいてください。イグアスの滝は、実際私に少なからずの影響を与えている。ヴァレリアに教えてもらったからではない。私は16才のときからイグアスの滝のことを知っていたし、しかもそれについての作品を作ろうとさえしていたのだ。考えてみればそれは初めて映像作品を作ろうと思いついた経験なのかもしれない。結局それは実現しなかったけれど。